



丸亀市教育委員会文化保存課提供

旅行日記の秀作を発表した 井上通女（つうじょ）（一六六〇—一七三八）

通行の難所であった関所

一六〇〇年の関ヶ原の合戦に勝利した徳川家康は江戸に幕府を開府するため着々と準備を開始しますが、その一例が一六〇一年に発令した「宿駅伝馬」の制度です。街道に平均して一〇キロメートル前後に宿場を設置し、そこに宿泊施設と幕府の公用のために使用する伝馬を用意させたのです。さらに一六〇四年になると、江戸の日本橋を起点にして五街道（東海道／中山道／日光街道／奥州街道／甲州街道）の整備も開始します。

一六〇五年に後継となった二代将軍徳川秀忠は江戸の防備を堅固にするため、五街道を幕府直轄とし、道幅を拡張、路面を砂利などで改善、両側に並木を植樹、一里塚を設置するなどの整備により、往来を便利にしました。そのような利便向上の一方、それぞれの街道には関所を設置しますが、これは関税を徴収するためではなく、通行を監視することが目的で、当初は街道全体に一七ヶ所、幕末には四六ヶ所に設置されました。

これらの関所の重要な役割は「入鉄砲出女」という言葉が象徴していますが、外部から江戸へ搬入される武器を監視する「入鉄砲」と、江戸から外部へ移動する「出女」を監視するという意味です。江戸時代には各藩は江戸に屋敷を構築し、そこに大名の妻女が人質として生活しており、それらの女性が逃亡することを防止するための手段で、通行のためには幕府の役人が発行する通行手形が必要でした。

父親と丸亀から江戸へ旅行

今回は関所を通過するのに大変な苦勞をした江戸中期の歌人で何冊かの旅行日記を執筆している井上通女という女性を紹介します。江戸時代に旅行日記を執筆した女性には意外に多数存在し、残存しているだけでも一三〇編ほどあります。それらの記録は高貴な身分の女性だけではなく、庶民の女性によるものもあり、当時の社会全体の教育水準が高度であったとともに日本の社会基盤が整備されていたことを示唆しています。

通女は四国讃岐の丸亀藩主の家臣である井上儀左衛門の四女として一六六〇（万治三）年に誕生しました。父親は藩内でも有数の朱子学者であり、母親も教養のある女性であったため、幼少の時代から高度な教育を享受し、八歳のときには『源氏物語』を暗唱できるほどでした。さらに一二歳になって漢籍も勉強し、自作の漢詩を江戸の当代随一の朱子学者林春斎に送付して指導されるような環境で勉強していました。

そのような背景から通女の才能は丸亀藩京極家の江戸屋敷でも評判になり、二二歳になった一六八一（天和元）年に江戸に生活する丸亀藩主京極高豊の母堂の養性院の侍女として出仕することになりました。そこで一月一六日に家族や友人に見送られて父親とともに江戸に旅立つこととなります。丸亀から帆船で三日をかけて、たまたま荒海であった瀬戸内海を横断して大坂に到着し、ひとまず丸亀藩邸に滞在します。

大坂では奉行所から東海道の途中にある新居関所（静岡県湖西市）と箱根関所の通行手形を入手します。これが面倒の原因になりますが、それは関所に到着してからのことです。大坂からは、まず淀川を川船で遡行して淀宿に到着します。淀川を遡行するのは両岸から人手で川船を牽引するので二日がかりの船旅でした。淀宿からは京街道を徒歩で移動して京都に到着し、数日滞在しますが名所見物もせず、江戸を目指して東海道を進行します。

冬季のため松明を使用して早朝から京都を出発し、二日をかけて桑名宿（三重県桑名市）に到着、ここからは小船で「七里の渡」といわれる海上航路を利用して夜中に宮宿（名古屋市熱田区）（図1）に到着します。睡眠もそこそこに夜明けとともに出発し、在原業平の故事で有名な八橋は面影もないとのことで通過、赤坂宿（愛知県豊川市）で一泊、翌朝も早朝に出発して午後二時に問題の新居関所に到着しました。



図1 七里の渡（宮）

新居関所の通過で大変な苦勞

ここは開府以前の二六〇〇（慶長五）年に家康が直轄の関所として創設、約一〇〇年間は幕府から派遣の新居奉行が管理していました。別名「女の関所」との呼名もあり、江戸から到来する「出女」だけではなく、江戸を目指す「入女」も監視するため女性の難関でした。そこで手前の御油宿や吉田宿の周辺から脇道へ進入し、浜名湖の北側を大回りして浜松宿や見附宿へ到達して新居関所を回避する旅人も多数いたようです。

当初、関所は現在よりも東側に位置していましたが、一六九九（元禄一二）年の高潮で被災して移転します。ところが、その建物も一七〇七（宝永四）年の富士山大噴火を原因とする地震と津波によって倒壊し、翌年になって現在の位置に再建されました。その建物もさらに一八五四（安政元）年の安政東海地震で倒壊し、翌年再建された建物が国指定特別史跡として現在まで保存されているという因縁のある建物です（図2）。



図2 新居関所跡（国指定特別史跡）

大坂の奉行所で発行された関所手形を所持していた通女には通過は心配がないことのように思われた。ところが一月二七日に新居関所に到着し、手形を提出したところ通行させてくれません。手形には「女」と記載されていましたが、通女は未婚で振袖を着用していたため「脇あけたる小女」と記載されていないと無効だという理由です。厳格に審査していたとも理解できませんが、役所仕事を象徴するような状況でした。

そこで手形の変更のため大坂に使者を送り、待機することになりました。文才のある彼女は「旅衣／新居の関を／越しかねて／袖によるなみ／身を恨みつづ」という和歌に感情を表現していますし、同様の漢詩も制作していますが、如何ともできない状況でした。ようやく一二月三日に修正した関所手形が到着し難関を突破できました。皮肉なことですが、この史跡の新居関所の境内には上記の和歌の石碑が設置されています。

江戸で評価された才能

ここまでの内容は通女の記録した『東海日記』による内容ですが、ここで日記は終了しています。初冬の寒気が襲来する季節に、毎日、夜明けとともに出発する過酷な日程に関所通過の心痛が加算されて体調不良となり、父親が日記の継続を禁止したためです。箱根関所は関所手形の不備もなく無事通過して江戸に到着し、藩邸では藩主の母堂の養性院の侍女としての仕事以外に、藩主自慢の才女として会合などにも随伴します。

その才能は際立っており、江戸の学者に評価されますが、才能があっても女性が学者として立身することは困難な時代で、儒者の室鳩巢（むろ きゆうそう）は通女が女性であることを残念がっていたといわれます。この江戸での生活は『江戸日記』に記録されていますが、三〇歳になった一六八九（元禄二）年に養性院が逝去し、丸亀に帰郷します。その気持ちを「**秋ならで／露けきものは／君を置きて／むなしく帰る／野辺のわか草**」と記録しています。

実弟の井上市兵衛益本に同伴されて帰郷する旅路は『帰家日記』に記録されており、箱根関所（図3）での検分の様子も記載されています。通女は「出女」に該当しますから、厳格な検査を経験することになりますが、取調べの女性が毛髪はバラバラにして検査するだけでなく、腰布を除去して秘所を検査することもあったようで「いかならんと胸つぶるる心地しつる」と記載しています。容易ではなかった旅行の様子が想像できます。

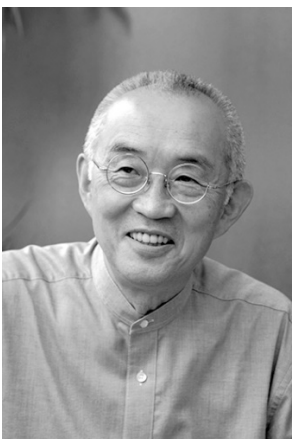


図3 再建された箱根関所

当時から評価されていた女性

丸亀に帰郷してから藩士の三田宗寿茂左衛門と結婚し、三男二女が誕生しました。五一歳になった一七一〇年に主人の宗寿が死亡し、そのときの気持ちを「**いづくにか／あまがけるらん／夢にだに／見る／こと難き／魂のゆくすゑ**」と追悼しています。以後は儒者として活躍する末子の三田義勝を育成しながら文芸活動を継続し、一七三八年に七八歳で死亡しました。当時としては相当の長寿でした。

現在では、それほど有名ではありませんが、通女が執筆した『東海日記』『江戸日記』『帰家日記』の三冊は「江戸日記の粋」と評価され、貝原益軒は平安時代の有智子内親王（うちこないしんのう、漢詩で有名）以来の学富才優と評価しています。また伴蒿蹊が世間で話題の一〇〇余名の人物を紹介した一種の人名辞典『近世畸人傳』（一七九〇）には、井上通女が「詩歌ともに成人にまされる才女」と紹介されており、当時はそれなりに話題の人物でした。



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。モルゲンWEBの連載「清々しき人々」より、『清々しき人々』、『凜凜たる人生』、『最新刊『爽快なる人生』（遊行社）など。